哀愁深まり

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
哀愁深まり

【Ｎコード】
Ｎ４０１０Ｌ

【作者名】
朝昼夜

【あらすじ】
一人の高校生が悩んだり楽しんだり苦しんだりする話を予定しています。

夕暮れの放課後

「俺さ、世の中って本当にどうしようも無い所だと思うんだよね」
同級生で帰宅部の福岡が、突然そんなことを口にした。放課後で俺と福岡以外は誰も残っていない、夕日に染められた教室。俺と福岡は清掃点検を行っていた。といっても、教室の用具入れが綺麗になっているかだとか、掃除が丁寧になされているかだとかっていう、適当なものだから適当に片付けてもいいのだけれど。俺と福岡は清掃点検の一々をしっかりとチェックしていた。福岡はきっとA型なのだろう。かくいう俺は、B型だけど。
で、清掃点検の結果を事細かく用紙に、俺が書き入れている最中に、福岡はそんな世迷言らしい一言を放ったのだ。当然俺は、耳を疑った。でも、その後にどんな言葉が続くのかわくわくした。普段、変哲も無い会話をしている友人が突然哲学めいたことを言い出すというのは気恥ずかしくもあるが、ビックリ箱のように何が飛び出してくるかわからない未知っぷりが、おもしろい。どうせなら俺のど肝を抜くような痛々しい発言をしてくれると、俺も後々思い出し笑いで腹筋を痛めることが出来るのだが。
で、福岡は俺のど肝を一発でぶち抜いた。
「やっぱさ、全員抹殺だと思うんだよ」
「ぐっ」
思わず噴き出しそうになった。腹の底から鯉が唸り上がってきそうになった。
こいつはもしかしたら、重症なんじゃないだろうか。
俺は胸が躍った。
「なんで全員抹殺なんだよ」
苦笑いにならないよう、面白そうに笑ってみせた。その方がむこうも気兼ねなく話せるというものだろう。
で、福岡は気兼ねなく俺に話して見せた。

「だってさ。どいつもこいつも嘘ばっかりだしさ。それに、全然面白く無いじゃん。なんつうか、世の中ってもっと面白くなるべきだと俺は思うんだよね」

福岡は熱っぽく俺に語ってくる。こんな福岡は初めてだった。大抵、彼という人間は教室では寡黙で、あまり騒いだりせずに朝昼晩を乗り越えるようなタイプだ。そんな彼がこんなに熱っぽく語るのは、普段冷やしているがための反動なのだろうか。それがどうなのかは知らないが、どうせなら、もうちょっと格好いいことを言って欲しかった。何だか福岡の言っていることは子供の駄々みたいで俺には受け付けられなかった。大人になろうとしてもがき苦しんでいる思春期という偶像そのものだと思えたのだ。

といっても、高校生なんてのは、そのくらい格好悪いほうが正しい姿なのかもしれないけれど。

俺はそんな風に分析的な思考をしてお高くとまりながら、福岡には「まぁね」という相づちだけ打つのだった。すると福岡は眉を潜めた。

「なんだよ、宏っちならもっと話に乗っかってくると思ったんだけどなー」

少し不機嫌になってしまった。相づちだけでは足りなかったらしい。

俺は苦笑いしてから、清掃点検の用紙に目とシャーペンを向けた。カキカキと、清掃用具入れの状態があまり芳しいものでは無かったことを書き記した。カキカキと、書くにつれてノッて来た。俺は字を書き出すと視界が狭まる。なんだか、熱中してしまうのだ。俺がシャーペンで書くことで生み出される文字。それは、俺という人間、中本宏という人間が生み出す唯一有意義な生産物だと思えた。文字に関しては妙な自信が昔からあって、書道の時間なんてのは俺にとっての至福だった。授業が始まってから終わるまで心が落ち着かず、はやく文字を書きたいと焦ったりだとか、書いている最中も、文字が、俺の持っている毛筆で形成されていくことに喜びを感じていた。

書き終わって完成した文字が誰よりも上手な代物だったならば、もう一日中気分は有頂天だ。誰かより下手糞だったら一日中ムカムカしてる。俺っていのは、文字に関して言えば恐ろしい程に熱狂的で、それゆえ少し周りからおかしく思われることもあった。だが、それが性分なのだから変えようもないし、文字に関する意識が俺の中から消えうせたら、俺には本当に何も残らない。きっと、なくなったとき俺は、人間という器を持った『空気』になってしまうのだろう。

「宏ちゃんはさ、どうなの」

俺のペンが、止まった。福岡の声が、頭の中に入り込んできたのだ。文字がぶれそうになる。だが、俺は残り一行程度で終わる『作品』を、なんとしてでも完璧な形で仕上げたい。俺は福岡の声をシャットダウンして、残り一行を一気に書き上げて見せた。

『概ね、悪かったと言えると思います』

まるで活字であるかのような理路整然な一行を俺は完成させ、思わず息をフーっと吐いてしまった。吹いてから、それは迂闊だったと気が付いた。

「宏ちゃんは人の話を聞けよな！」

顔を上げると、浅黒い福岡の顔が怒気を滲み出して真っ赤に染まっていた。結構、怒っているらしい。

「すまない。で、何だっけ」

「字のことになると、ぜんぜん人の話聞かないよな」

やはり怒ってしまっている。思わず教室に助けはないかと、朱色に染まって寂しげなそこら中を見渡してみたが、助けがあるはずもない。いまは、遠くから野球部の勇ましい声が聞こえてくるような、放課後なのだ。校舎には文化部の連中しか残っていないのだろう。彼らだって部室で各々活動しているわけだから、帰宅部約二名のほかにはこの教室に誰かがいるはずも無いのだ。

福岡が、ハーっとため息をついた。さっきの俺の達成感とは違って、疲れた風な漏らし声だった。顔の赤みも引いていって、いつもの浅黒いスポーツマン風の顔つきに戻った。彼は明らかに運動部な

風格なのに、帰宅部だ。かくいう俺もどちらかと言えばスポーツマン風だと言われるのだけれど、どちらかだ。俺はどちらでもなく、中途半端らしい。地味すぎず派手すぎず。たまに、そんな風に言われる。

「なんか面白いことねーかなー」福岡がぼやく。

「面白いことなんてそう無いじゃん」俺もぼやく。

「そうなんだよなー」また福岡がぼやく。

面白くもおかしくも無い会話をしている。これが日常ってやつの正しい姿だ。…だが、俺はふと閃いた。

「福岡がさ、面白いことやればいいんだよ」

「んあ？」

「聞こえなかったのかよ。福岡が、みんなを面白くさせるようなこと、すればいいんじゃないの」

「俺がぁ？」

福岡は可笑しそうに笑った。だが、さっきの面白くも無い会話よりは、目が輝いた。

俺は閃きで言ってみただけだけれど、案外、効果があるらしい。

――面白い毎日を送りたいならば、まずは己が行動に出るべきだ。

誰かがテレビでそんな風なことを言っていた。そのことをふと閃いただけだったのだけれど。でも思い出したということは、心に残っているということなのだろう。たしかに、至極、正論だ。格言と言ってもいいくらいまともだと思う。

「いや、うん。まぁ、そうなんだけど」

福岡は苦笑しながら、曖昧な返事をした。目は多少輝いているけれど、彼の何かがより輝くのを押し止めていた。

「いいじゃん。なんか面白いことやってくれよ。俺もその方が楽しいし」意地悪に無責任に追求してみる。

「うるせぇな」福岡は煙ったそうにした。

「宏ちゃんは見てるだけかよ。普通、こういうときには『じゃあ何

か一緒に楽しいことしようぜ！』だとか、『じゃあ俺も何か楽しいことを探してみようかな』だとか。そういうのが青春の日々を送っている若き青少年の言葉なんじゃないの？」

福岡は撒き散らすかのように言った。その通りすぎて返す言葉が思いつかなかった。

だが、福岡には申し訳ないが。

「俺は、綺麗な文字を書いたら、満足しちゃうから」

我ながら、みみっちすぎる青春だとは思うのだが。

「みみっちいやつ」

福岡も、同じ感想を抱いたらしい。

それからは福岡も俺も、しばらくお互い何も発さずに、そのまま教室で佇んだ。

宙を見ている俺と福岡は、何かを探しているように端からは見えたかもしれない。福岡に関して言えばまったくその通りで、彼は熱中できるような面白い何かを探している。俺に関して言えば、『文字が青春』などと福岡には言ったが、結局、強がりみたいなもんだった。

遠くで、自然と汗が想像されるような、暑っ苦しい歓声が聞こえた。紛れも無い、青春の声だ。

『オオオオオオオオオオオオオオオ、ッホイ！』

夕焼けを通り過ぎて俺たちの耳に入り込んでくるその歓声は、やかましくもあったけれど、紛れも無い青春の象徴だった。彼らは羅針盤の指し示す方向にきちっと歩み進んでいるかのようだった。いや、歩むどころではなく、疾走しているのだろう。

俺は思わず、福岡を見た。スポーツマンであるべきな、その浅黒い顔を見てみた。するとどうでしょう。みているだけで落ち込んでしまうような、憂鬱をその身に背負い込んだような、口で言っては失礼にあたるかのような。酷く萎れたスポーツマン顔がそこにはあった。まるで去勢された獅子だ。

見ているのに耐え切れず、俺は窓の外に目をやる。するとカラス

が何羽か校舎の突起している部分で、黒い羽を休めていた。嘴で羽を突っつきながら、彼は一体、どんなことを考えているのだろう。少なくとも青春の憂いを帯びている様子ではない。

俺の視線に気が付いたのだろうか、カラスが俺のことを見た。俺は何を思ったのだろうか、気まずい光景を見てしまったかのように目をすごい勢いで反らした。反らした先には去勢された獅子ののっぺりとした浅黒い顔があって、また俺は何を思ったか首を勢い良く捻り上げてしまいカラスと再び見合った。カラスは、完全に俺を舐め切っていた。『はっ』、といった風に、何かから取り残されてしまっている俺と福岡の情けない姿をその黄色い両眼で見下げ尽くしていた。

俺は気が付くと福岡に言っていた。浅黒いのっぺり顔は見ないようにしながら、カラスから何とか目を離さないようにしながら、気が付くと口走っていた。

「なぁ、福岡」

視界の隅で、福岡の顔が持ち上がるのがわかった。カラスは校舎の突起から足をどけ、夕暮れの暁の中を飛翔していった。俺はカラスの悠々しいその後姿を眺めながら、宣言の合図をする。

「俺ら、何かをしよう。このままじゃだめだ。福岡、俺たちは何かやれるはずだ。こんなところでくすぶってたら、きっとダメになる。みんなに置いていかれて、ぐんぐん距離を離されて、何時の間にか何処にいるのかもわからなくなっちまうんじゃないかな。福岡、俺ら、何かをしようぜ」

俺の合図は、完璧だった。ど決まりだった。こんな言葉まさしく青春だった。

俺は、カラスが見えなくなった後に残った暁の空白から目を離し、福岡に視線を戻した。

「な、福岡！」

俺の掛け声に合わせて、真顔だった福岡はぐにゃりと笑った。これは完全にノッてきている。今日一番の目の輝きようである。彼を

押し止めていたものはきっともう何一つ無くなったのだろう。いいよいいよー、福岡君。ノッてきたねー。福岡君は、口を開いた。

そして、俺に向けて、彼は宣言をしたのである。

「いや、やめとくわ」

と。

カラスが遠くで一鳴きしやがったよカァーってね。勿論。え、って、なりました。

家から出る。

青春の味は甘ーい蜜の味。なんて、どこの誰の屑が言った言葉なのだろう。福岡が世迷いごとを言ったあの日から、俺の脳内では『青春の味は甘ーい蜜の味』というキャッチフレーズじみた言葉だけがあくせく働いて駆け巡っていた。まったく持って迷惑極まりない状態になってしまっていて俺は困窮している、なんて、困窮なんていう普段使わない言葉が最近俺の頭の中では時たま溢れ出てくる。どこで覚えたのかもわからない日常で使ったら『恥』になりそうな言葉ばかりが疾駆しているのはまったく持って愚蒙な創案なんだが。なんていう風に、今のはわざとだが、これが日常的になってしまったら俺が青春の甘い蜜の味を味わうのは現実的に不可能になってくるだろう。だからこれ以上戯語で戯れるのは謬見です。

まったく持って困った状態の俺だが、相変わらず文字を書くのは好きだった。だから日曜日で学校の無い俺は、寂しいことに空しいことに、文字を書いていた。一枚のメモ用紙に様々な、複雑で濃密な漢字やら簡潔な漢字やらを書き記しまくって、漢字だけで一つの『絵』を作るという、あまりにも愚かしいというか最悪に空しくなる行為をしていた。とりあえず、この行為自体が空しいのだが、普通こういうのは手書きでやるものではないだろう。パソコンの画面とかで、活字で打って顔なり動物なりの、絵にするものだろう。それなのに俺は手書きでそんなことをやっている。手書きで、漢字だけで顔を書こうとしている。誰の顔かっていうと、テレビに毎日映っている最早見た目がじーさんの域を超えている年配アナウンサーの顔です。

つまり俺が何をしているかというと暇だからあえて余計に退屈なことをやってみよう、と試みているのである。そしたら退屈は余計に退屈になったのだが。

今日は天気も良い。外では小鳥が鳴いているし、庭では猫だって

犬だって日溜まりですやすやと眠りに落ちている。犬の名前はシロで猫の名前はクロだ。彼らは平和そうにお互いに寄り添って眠っている。絵になる光景なのだからそれを模写出来れば幸いなのだが。あいにく漢字だけで描ける代物というのは顔が限界である。犬と猫の心温まる休憩の様子を漢字だけで描ければ、それだけで職人の技だ。当然俺はそんな神業を持ち合わせていない。そんなことを考えている俺の目の前を、まな板が通り過ぎた。

家の中は騒がしい。というのも弟妹弟弟妹弟弟妹妹が、騒がしいからだ。親二人は現在出掛けている。しかし弟妹弟弟妹弟弟妹妹は全て遊びにもいかないで家に健在である。そう我が家は十人兄弟なのであり、俺はその長兄なのである。そんな家だから、非常に、今現在騒がしい。みんな、ほぼ全員ただの餓鬼である。さっきからお茶碗やら椅子やらクッションやら枕やら下敷きやらフィギュアやらダンボールやら一輪車やら缶ビンやら。いろいろなモノが自宅内を飛び回っている。ガチャガチャかなり五月蝿い。煩わしい。好い加減にせぃよ、と述べたい。弟妹弟弟妹弟弟妹妹を持つとまったくもって家でくつろぐことなどできやしない。本当は、いつもならば福岡の家に避難しているのだが、今日あいつは学習塾である。そう、彼はせめて学力の面で他と差をつけようとでも図っているのだろうか、塾に通っているのであるからして、彼は自宅にいないのである。だから、俺はこの騒がしい様々な物体が去来する喧騒の中で、一人空しく空しいことに興じるのである。だから俺はテーブルで胡座を掻いてひたすら黙秘、黙秘、黙秘黙秘黙秘。

がん、がっしゃん、どかどか、黙秘、どっこん、ぐわー、黙秘、ばりばり、ごあごあ、黙秘どーん、パリーン、ぐわっしゃあ、黙秘、がん、がっしゃん、どかどか黙秘、どっこん、ぐわー、黙秘、ばりばり、ごあごあ、どーん、パリーン、ぐわっしゃあ、がん、黙秘どーん、どっかーん黙秘。虚脱。

「もう、やーっめっちゃおー」

ぐわーって俺は座布団を二枚敷いて勢いつけて横になった。携帯

にイヤホンを繋いで音楽。家庭内の騒音を爆音を流すことで完全にシャットダウンした。流れるミュージックは激しくロックだった。どう激しいかというといろいろと激しい。曲調も激しいが歌詞も激烈な代物ばかりで、『俺はカレーが好きだからとにカレーが食べたい。そういった理由で日本をインドに変えてしまえばいいと思う』という歌詞だとか、『愛媛のみかんはいいよね。おいしいよね。みんなでみかんを食べようぜ！』という歌詞だとか、『俺は腕相撲なら誰にも負けるつもりは無い。だから、俺と腕相撲勝負しようぜ』という歌詞だとか。全てがストレートで変化球を入り混ぜない激しさだった。だからだろう、俺の心は虚脱に支配されていたはずなのに、むくむくと気合が入ってきた。何だか脳味噌の視界が急にパッっと開けて、何かをしなくちゃいけない、なんて気持ちに変わってきた。

「うおおおおおおおおおおお」

気が付くと俺は叫んでいた。イヤホンを耳からちぎりとって、俺の叫び声で一気に静まり返った弟妹弟弟妹弟弟妹妹を一瞥。鬼気迫る俺の睨みつけに、弟妹弟弟妹弟弟妹妹たちはまるで息さえもしかねるかのようだった。先ほどまであんなにはしゃいでいた彼らが萎縮して脅えた様子に、俺は妙な快感というか爽快感を体の芯からほどばしらせた。こうなったら誰にも止められません。

「うおおおおおおおおおおお」

俺はそのまま家を飛び出していった。庭で呑気に日向ぼっこをしていた犬猫でさえ、目を覚まして俺の方に首を傾けていた。それ程に俺の勢いはすさまじかったのだ。俺は、果たして俺はどこに向かうのだろう、と心底これからどうなるのか理解できないまま、太陽の昇っている夏空の下を駆け巡りはじめたので、ある。

勢いなどというのは所詮勢いだけだから、すぐに体力など尽きて

へたばってしまうのが、オチだ。で、俺はものの見事にオチにはまってしまった。馬鹿丸出しに汗を掻いて、公園のブランコで本日二度目の虚脱を体験する羽目になったのである。羽目になったというか、まあ、自分でそういう状況に追い込んだのだけれど。

鉄製が錆びれているブランコは緑のペンキが所々剥がれてしまっていて、俺の体重を支えるのが辛いのだろうか、ぎしぎしと音を鳴らす。

哀愁を帯びている。これぞ、哀愁。郷愁。刹那。蘇芳。鶯。馬鈴薯植う。葱。俤。恵比須顔。玉容。恩赦。勅許。堪忍。山稜。稜線。

「なんだよ」思わずひとりごちる。

両手で頭を抱えこんでみると、ものすごく熱がある。次々に脳内で溢れ出てくる、普段あまり使いそうに無い、辞書の中でお蔵入りしていそうな漢字たち、文字たちが、次々に。急にどうしたというのか。俺は、訳も分からずにおかしくなったのだろうか。

「うおおおおおおおお」絶叫だ。

自宅で叫んだように、また叫んでしまった。おかしい。かなりおかしい。まるで自分の脳味噌が自分のものじゃないみたいな気分がしてくる。自然と唇だとか肺だとかが躍動しているかのような、そんな気分が感じられてくるのは、これは錯覚なのだろうか？錯覚ではないんじゃないだろうか。

晴れ晴れとした、鬱屈が皆無の、空を眺めた。混乱してきた俺の脳味噌を爽快感がクールダウンしてくれるんじゃないか、なんて思ったからだ。空は俺に迫ってくるかのようだった。入道雲が、遠い遠い遥か彼方で、俺に堂々としている。俺に堂々と、その膨れ上がりで立ち向かって来ている。迫り来ているのだ、入道雲が。俺の視界でどんどん体積を広げて、押し狭まってくるかのようだ。何かが、何かが。

何かが、俺を急き立ててくる！入道雲がでかい！入道雲がでかい！

「うおおおおおおおお」ブランコを俺は猛烈な勢いで漕ぎ始めた。

猛烈な勢いで錆びれたブランコにギィコギィコと無理をさせる。

ブランコが悲鳴をつんざくが俺は構わずにブランコを漕ぎ漕ぎした。誰がどのように見ても変態だった。どの角度から見ても変態としか言いようの無い状態の俺だった。なんだって、そんな有様になってしまうのでしょうか、俺にはわかりません。わかりたくもないし、他の人間が今の俺を見たらどのように軽蔑するかもわかりたくないし、俺が明らかにやばい状態だということを俺自身が理解したくもない。って、こう思っている時点で俺は俺がやばいことを自覚してしまっている。ブ、ブランコを漕ぐしかない、俺に残されている行動の余地はもはやブランコを漕ぐことのみに限られているのだ。誰かの助けはいらない。ブランコの助けがあればいい。俺は漕ぐ。俺はブランコをどこまでも漕いで行く。いまやブランコは半月円を描くほどの上昇もしくは下降を繰り返している。ブランコを漕げば漕ぐほど、必死にブランコを漕げば漕ぐほど、俺の体は風になっていく。風と一体化して、どこまでも飛んでいけるような気分にさせられる。どこまでいくのだ、俺は！何処に向かうのだ、俺は！

「うおおおおおおおお」三度目の絶叫と共に、吹き飛んだ。

何か金属が弾けるような高音が耳に届いた。「あっ」と呻いたところでもう遅い。俺は寂れた緑のブランコと共に空中に浮遊。堂々としている入道雲に挑戦するかのようにして青空の下、公園で浮かび上がった。高度四メートル。高度四メートルの刹那で、俺は判然とした。判然としたのは俺の凄然だ。凄然がはっきりと俺の心を襲撃している。むなしい青春。なんだかよくわからない毎日。

ずしゃあああああああああっ、と、なった。

鍵盤

深い眠りから、覚めた。先程暴れたせいだろうか、なんだか気だるい。

瞼を何度か開け閉めすると、病室のような、清潔そうでなおかつ全てが真っ白な部屋にいることがわかった。天井も壁も床さえも真っ白で、俺の寝ていたベッドの右側にある花瓶も、そこに挿されている花だって、白い。左側には窓。窓から青空が入り込んでくる。さっきの迫り来る入道雲の姿は、この部屋では見えなかった。

向かい側もベッドだ。

そのベットに座っている人を見て、ここは夢の中なのだと気が付いた。

福岡が、ベッドに居座っていたのだ。

「よお、宏ちゃん」彼は俺に挨拶をした。

しかし俺は彼に挨拶を返すことが出来なかった。というのは、彼が異常だったからだ。なぜか、彼の目玉の片割れが欠けているのだ。彼の瞳にひびが入っているのだ。縦に稲妻のように、一本のひびが瞳の中で血の色だった。なぜそういうことになるのかはわからない。

「おい、宏ちゃんってば」

彼は何度も俺に挨拶をした。俺が挨拶を返すまでは繰り返すつもりのようだった。

「なあ、宏ちゃんよお」

「聞いてんのか宏ちゃん」

「宏ちゃんってばよお」

「聞いてくれよ宏ちゃん」

「宏ちゃん」

繰り返し、繰り返し。福岡は繰り返し俺に挨拶をする。そうこうする内に彼の瞳に入り込んでいる稲妻が、巨大になっていった。巨大になり巨大になり、瞳さえも突き抜けてしまうかのようだった。

「福岡」
呼びかける。すると福岡は浅黒い顔の、その片頬を持ち上げて、卑屈な微笑み方をしてみせた。福岡のそんな笑顔を見たのは、初めてのことだ。
「やっと挨拶してくれたか」
福岡は卑屈な微笑みのまま俺に言うから、不気味だった。そして福岡は、その卑屈な表情のまま元に戻さなくなった。俺の方を見たまま、一時停止ボタンを押された画面のように、福岡は停止してしまったのだ。
「どうしたんだ」話しかけるが反応が無い。福岡は動かない。
福岡が停止の状態になってから何分後のことだろうか。一時停止の状態が解除されたのか、福岡の様子に変化が訪れた。福岡の瞳に切り刻まれていた血が、みるみる福岡を飲み込み始めたのだ。福岡の表面を覆い尽くすかのようにして、純白のコントラストだとでもいうのか、真っ赤なヒビが福岡を包み込んでいく。福岡はみるみるいなくなっていき、十分後のことだろうか。ついに、福岡はヘンなものに変わってしまった。ただの真っ赤なオブジェになってしまった。一言で表すなら、それは丸い筒だ。全体的に見るとアルミ缶のように、一見、錯覚するが、数秒観察するとその実態が複雑で怪奇な芸術品だということがわかる。上部分の表面には象形文字みたいなのがぐねぐねと彫り込まれていて、ここからオブジェの背後は見えないが、おそらく三百六十度に象形文字らしきぐねぐねは掘り込まれているのだろう。オブジェの胴体が真っ赤なのに対してそれは真っ黒だから、遠目からでもそれは文字らしく見えたのだが、見方を変えればひじきにも見えた。
上部分は赤と黒で構成されているが、中部分は完全に赤だ。目が冴える鮮血のような赤。日光を反射していて眩しい。人間のへそにあたる部分に妙な突起がくっ付いていて、よくよく見るとその突起には取っ手がくっ付いている。突起が取っ手なのではなく、突起に取っ手がくっ付いているのだ。なんで俺がそういう風に理解できた

のかは俺自身謎だ。きっと夢の中だからそういう不可思議な現象が起こるのだろう。

下部分は突起が付いていないが、もろもろ中部分と同じだった。しかし、俺はまたもオブジェを真剣に見た。すると、なんということだろう。下部分は、上部分や中部分とは根本的に違う存在であるということが判明したのだ。何が根本的に違うのか。違ったのは作られ方だ。上部分や中部分はアルミ缶らしき光沢を放っているのだが、下部分は生物らしき蠢きで作られていた。真っ赤な生物。そいつが、オブジェの下部分を構成している。さらによくよく見るとそいつの正体が判明する。それは、友人の『彦馬呂』の、顔だった。彦馬呂は、俺や福岡とよく学校で行動を共にする、文化系の、色白痩せっぽ野郎だ。その彦馬呂の顔が、馬みたいに細長い顔が、下部分でたくさん蠢いているのだ。ペイントされたかのように真っ赤な顔が、なぜ今まで気が付かなかったのだろう、オブジェの下部分に『鱗』のようにたくさんへばりついていたわけなのである。

「なんで、こんなことになるんだ」いろいろと衝撃的だ。

夢の中のくせに、ぼんやりとしていた頭が少しはっきりとしてきた。ベットから降りて、白い床に立つ。すると突然、透明感のある音が鳴って驚いた。もう一歩歩いても、再び音は鳴った。それも高音だったが、先程よりも高い音のようだった。俺は、まるで床がピアノの鍵盤であるかのようだ、と冴えたことを思った。

筒のようなオブジェになってしまった福岡、の元に、俺は慎重に――――高音を鳴らしながらだが――――近づいた。慎重に立ち向かわなければどんな目に合うものか、想像も付かない。こいつが危うい爆弾のような代物だということは誰の目にも一目瞭然だ。

「福岡…いや、彦馬呂か」

なんて声をかけたら良いものかわからないので名前を呼んでみた。ギョロっと、いくつもの彦馬呂の馬顔が一斉に俺を見た。俺は戦慄してしまって高音を三つ、鳴らしてしまった。後ろに三歩引き下がったのである。

「ウアア」
彦馬呂が呻いた。低音でドスの利いた声だ。普段の甲高い彼の声とは大違いだ。
「なんだ。苦しんでるのか、彦馬呂」
そういう風に聞こえる声だった。彦馬呂は再び「ウアア」と呻いた。なんだか可哀想だった。
何かに反抗するように、或いは何かから逃れようとするかのように。彦馬呂は何度も何度も首を右へ左へ捻り続けていた。そういう彦馬呂は一人では無い。オブジェの下部分に付いている馬顔の全てが、右往左往繰り返しているのだ。あまりにも哀れで、見ていられないその彦馬呂に、俺はなんと声をかけていいものかまったくわからず、何分間だろうか、しばらくそこで戦慄していた。時々足踏みをすると、ピアノの高音が鳴る。彦馬呂はその音が耳に障るのか、時々さっきよりもひどい呻き声を発する。地獄に叩き落された人間の声じゃないのか、と俺は思った。
それから、何分後のことだろうか。
「中本くん」
声がした。俺は久しぶりにオブジェから目を離して、思わず真っ白な部屋を見回した。だが、真っ白と青空があるだけだ。
「中本くん」
誰の声だか気が付いた。だが、あまり聞きたくない声だと思った。数年前を、思い出すからだ。このままだと、俺はきっと数年前のことを思い出してしまう。学校での朝方の光景。いやーな、俺のなんら平凡な人生の、一番の非日常の記憶。
「中本くん」
仏の顔も、三度までだ。
「黙れよ！」俺は聞こえてくる女性の声を耳から掻き消すために、喚き散らした。
しかし声は続いた。
「中本くん」

喚き散らしたおかげか、少し落ち着いた。その状態で冷静に耳を澄ました。するとわかったのは俺の勘違いだ。俺は勘違いをしていたらしく、よくよく聞けばその声は俺が想像した彼女とは別の人物のものだった。彼女の声を俺が聞いたのは一度きりだったが、はっきりとその声を俺は覚えている。だから、違いはすぐにわかる。

「中本くん」

「誰だ」

陽が差し込んでくる窓の外側に、『そいつ』は立っていた。

「人間？」

俺は問いかけた。失礼な言葉だが、そこに突っ立っている女性はまるでマネキンのように生きている感じが希薄だったから、そう訊ねたのだ。すると彼女は、再び「中本くん」と述べてから、血色が良くやけに細い唇をパクパクとして、喋り出した。その飛び出した台詞を聞いて俺はまたも床の鍵盤を鳴らしてしまった。今度は五歩だ。

「あたなの目の前にいる男性二人はあなたの友人でした。今はもう跡形も無い姿に変わってしまいましたね。あなたはどうしますか」

この人は頭がおかしいのだとすぐに気が付いた。まあ、夢の中に出てくる人物だからおかしいのだろうが、それにしては目の前にいる女性は今までどの現実で見てきた女性よりも綺麗だった。こんなに綺麗な人物が、俺の脳味噌の幻の世界に登場するのはおかしな話だと思った。それにこの夢は俺にとって初めての感覚の世界だ。夢の割には現実感があるのに、生じてくる出来事は夢みたいなことばかりだ。

「ウアア」鍵盤の音に反応したのだろうか、オブジェの彦馬呂がまた呻いた。俺が彼に振り向くと、彼に異変が生じていることに気が付いて、鍵盤を二回踏んだ。

斑点が噴き出ているのだ。オブジェの上部分、中部分、下部分のあまねく全ての箇所から、アザのような斑点がボツボツと飛び出ていたのであって、そんな状態を垣間見た俺は完全に悶絶してしまい、

すぐに吐き気が襲い掛かってきた。オブジェは、あまりにも気持ち悪かった。
「やめてくれ」と俺は懇願した。オブジェが俺に向かって歩いてきたのである。オブジェが歩くと鍵盤は低音を鳴らす。
ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ド。
俺の目の前までオブジェは迫った。「ウアア」とオブジェは俺に向かって呻いてくる。俺はうごけない。
「中村くん」鍵盤を鳴らさずにどうやって近づいたのだろう、さらに混乱させようとでも言うのか、背後から耳元で囁かれた。
その感情の無い声が、どんどん遠くに消えていって、「ウアア」も遠ざかっていって、視界が狭まってついに無くなっていった。

マッドサイエンティスト北村

ブランコにぶら下がっていた俺が目を覚ました瞬間、俺は自分の普段の日常に立ち戻ることで、また同じように思春期の苦悩を感じ、日々俺の中で膨れ上がっていた自意識に対する気味悪さやら社会とどうやってうまくやってくかだとか、そういうことで迷う羽目になるのだと思っていたし、実際そういう毎日を送ることに異論は感じていないはずだった。というか異論を唱えたくは無かった。というのは、俺は、福岡には『面白いことをやれ』だとか『面白いことをやろう』だとか言ったりしたが、実際問題そんな面倒なことは、冷静に立ち返ってみると嫌だった。そういうのは、ムダに頑張ったり傷ついたり傷つけたり巻き込んだり巻き込まれたりする割には、報われないって、時代が教えてくれているからだ。そんなことは周囲の人間たちをじっくりと見てみればわかることだった。特にテレビや俺たちよりも年上の人間たちからは、そういう知識を教わったような気がするし、親切心からそれを教えてくれる人だっていた。今の時代に大切なのは慎重さである。それこそが、一番報われることだからである。それに露骨に反発する態度は、格好悪い。だから表面的にでもいいからおとなしく従って裏では彼らを小馬鹿にする、あるいは軽蔑でもすればいいのだ。ある程度に、目立たない程度に、時々あえて目立ったりしてみたり。そういう風に、賢く。日々、油断せずに。時々息抜きをしながら。

っていうことに納得出来なくて物事から逃避したりだとか闘ってみたりだとか、そういうのが青春の姿？っていうか、そういうのに真剣に取り組んでみればドラマチックな最後も迎えられるかもしれないし、ダメな人はダメかもしれない。しかし、頑張って抜け道を探して、時代を切り拓いていくのです。そうすれば豊かな将来になります。って、うさんくさすぎる。それよりも毎日社会でうまくやっていくために必死です。ドラマチックなんてやってる余裕はない。

俺にはまあ文字があればいい、なんて開き直ったりするのが一番楽かもしれない。そうすれば自分の世界の中で愉楽することが出来るから周囲の目を気にせずにすむ。が、そこで問題になってくるのがじゃあ社会で勇猛果敢に生きていかなければならない年齢になった時にどうすんのあんた、って話で、運良く今まで育ってきた育てられた人間が自立、自活出来る人間にならなかったら今まで食い散らかしてきた鳥さん豚さん牛さんその他もろもろにどうお詫びをつけるのでしょうか？という風に深く考えすぎてしまっているんですが、どうしたらよいでしょうか、ってこんな相談どんな親にも親戚にも友達にも恥ずかしすぎて出来るわけ無い。それに、いざ相談ってなってしまったら、おそらく話そうにも上手に話せないだろうし、誤解されたら困るし、理解されるかどうかもわからないのだ。これで全部話してみて理解されなかった一体全体どうなってしまうのでしょうか。ひどいことになるに違いない。ただでさえ余計なことでごっちゃになっている状態なのだから、また余計なことを考えて余計にごっちゃになるに決まっているのだ。つまり、悪循環である。だったらもう何も考えないのが吉である。だが、何も考えていないと社会で上手くやっていけない。先見の明が無い者は敗北するからだ。

と、こうやってぐちゃぐちゃになっていく多忙の毎日を俺はこれから送るのかな、考えすぎだなー、気持ち悪いねー、要領悪いねー、真面目だねー、なんて思っていたのだが、ブランコを中心にして広がる情景、つまり俺の視界から見える光景。それが異常なことになってしまっていたから、もう考えなくてもいいのかな、と思ってしまった。少し、安心したのである。

――――中本宏。彼が現実拒否状態に陥ってから既に半年が経過しているが、いまだ回復の兆しは無し。やはり私が開発した脳内ストレッサー調節装置の機能が正常で無いということなのだろうか？いや、だが、それを認めるわけにはいかない。それを認めた瞬間に私

はマットサイエンティストとしての誇りを失ってしまう。そうしたらこれから先俺はどのように生きていけばいいのだ？これまで俺は非社会的に、パンクな感じで毎日をエンジョイしてきたというのに、いや、エンジョイなどとは言うがさほど面白い毎日でもなかったのだ。実験に次ぐ実験、開発に次ぐ開発。あまりに日々を圧迫してくる実験や開発。最近俺の脳内が開発されてきてしまったのだろうか、いろいろとよくわからないものが見えたりするので怖いし、近頃はビーカー見ると足がすくむ。メスシリンダーを見るに至っては悶絶してしまう。だから最近一日に必ず三回はぶっ倒れる。その度に助手の助川さんに助けられる。助川さんもマッドサイエンティストな性質のお方で、彼女のような美人と一緒にお仕事できるのはありがたいのだが、マッドサイエンティストを名乗っている以上、迂闊に彼女にアタックするわけにもいかない。迂闊に「食事でもいきませんか？」なんて言ってみろ、俺はマッドサイエンティストから一気にナンパジジイに降格である。…こんなことを考えている時点で既にマッドサイエンティストとしての何かを失っている気がする。昔はこんなんじゃなかった。もっと気の利いたことを頭で思い浮かべて実際に言葉で出していた。それで周りのみんなをどっかんどっかん言わせるのがマッドサイエンティストの俺の隠れた素質だったはずなのに、今ではナンパジジイ候補だ。何ナンパジジイって？南国のフルーツみたいな、パイナップルみたいな響きだよな、ナンパジジイって。パとナしか合ってないけど。

マッドサイエンティストの北村が、理知的にメガネを片手で押し上げてみせる。彼は窓一つ無い密室の地下実験室の中で、表面的には冷静にパソコンのディスプレイに顔を向けていたが、内面に至っては中本宏と同じくらいに悩み抜いていた。そんな彼も今年で三十歳。青白く大人びた顔をしている割に、内面はティーンエイジャーなみに混濁している様子だ。

北村は、意識を回復しなくなった中村宏の面倒を見続けている。

というのは、中村宏はもはや回復の見込みが無い人物だからマッドサイエンティストにいっちょ預けて奇跡に期待してみましょ、ということになったのである。

なったのであると書いたが、まあかれこれ、色々と悩みぬいていた中村宏がブランコで空を飛んでから半年の時間が流れている。月日が経つのはまったくもって速いものである。

あいでんてぃてぃーくらいしす（前書き）

まあ、めちゃくちゃになりましたが、気にしないで読むといいよ！

あいでんてぃてぃーくらいしす

夢落ちだった。
なに、マッドサイエンティスト北村って。なんていう風に言うと、ハ、夢落ちとか完全にネタが尽きてんじゃん、なんて思われるのかもしれないが、実際のところ言えば『マッドサイエンティスト北村』なんて人物、邪魔である他にないってなもんで、こんなんじゃ俺の青春的ストーリーがちっとも進むはずがない。てなわけで、俺はむっくりとブランコから吹き飛んだ身体を、痛いながら起き上がらせようとする。膝がとんでもなかった。膝がかつてない反抗期で熱を発していて困窮したくなるのだが、まあそんなことで悔やんでいる場合ではない、さっさと青春ストーリーを謳歌しようかな、なんて思っていたのだが未来がちっとも見えない。
　どうすれば良いのかちっとも頭で閃いて来ないのである。
「う～ん、くまったなあ」
なんて呟きながら公園を一回りしてみたが、別に何も楽しいことは起きない。公園の中央にドスンと『俺おっきいでしょ？』ってな感じで鼻をのばしている象さん型滑り台を見つめながら、「う～ん、くまったなあ」なんて呟くが、やっぱり何にも楽しくない。
仕方が無いので何か妄想して楽しもうかな、っていうことにした。
「俺は超時空戦死で、二階級特進である」
なんてこった、超時空戦士と言いたかったのに士を死にしてしまったばかりに、二階級特進してストーリーが終了してしまったではないか。失敗だ。う～ん、妄想をするにしても注意深く進まないといけないんだなぁ、迂闊に妄想すると変なことになっちゃうんだなぁ、なんて反省してから、また妄想を開始した。
俺は超時空戦士で、仲間たちと一緒に宇宙で戦うことが趣味。いっつもロボットに乗りながら敵をガンガン打ち落としては、『俗物どもが』なんて叫んだりしてストレス解消したりしてる。

そうやって叫んだりしないと超時空戦士としては失格だから、注意しないといけません。
仲間たちなんかはもっとひどい。仲間はみんな変な格好をすることが趣味で、ロボットもグロテスクな奴を好むから煩わしい。彼らは敵を倒すと『みんな滅びてしまえばいいのよ！』なんて、超時空戦士とは思えない一言を発したりするからついていけない。
やっぱり、『俗物が！』程度の罵りが、愛嬌もあって丁度いいよね。なんて言いながら、俺は『グワンダム』っていうロボットで今日もＳＦ妄想。何回も繰り返しロボットに乗り込むことで、錬度を上げていく。そのうちにどんな敵でも俺には適わなくなってしまい、何をされても全然へこまない。それどころか痛みすら感じないよ、すごくね、すごくね、俺？　っていうか、そんなことはどうでもいい！　あんまりロボットのこと言ってると、ほら、世間一般に対するウケがあんまり良くないでしょ？　だから控えなきゃあ、世間からはみでちゃうじゃん？　もっとノーマルなさ、読んでる人がひかないようなさ、面白さ満載の妄想をすることで人々を楽しませなきゃ干されちゃうじゃん♪　なんつってはしゃぎながら、もっとロボットに乗らなければならない。
ロボットにはメンタル共有システムというあり得ない技術が組み込まれていて、俺の脳味噌が混乱をすればスルほど、ロボットも脳味噌を暴走させて爆発するという連動システムになっている。つまり、こうやって俺がキ〇ガイなフリを妄想を通じて行うことで、ロボットもキ〇ガイなフリをしてくれるから、演出上めっちゃあり得ない力で敵を破壊してくれて面白いことになる。つまり、結果として、あり得ない妄想をすればスルほど、物語は良い方向、つまり既存の物語的要素を全て内包しつつ、しかし真新しくてみんなを楽しませることが出来る最強の物語に進化するのである！
って、んなわけねーだろーが、あほか。こうやってどんどんあり得ないことを書けば書くほど、読んでいる人は気分が悪くなること必須だし、テンションも駄々下がりになってしまう。つまり、どうい

うことかというと、世間から干されます。
困窮してしまい、どっかに放り投げられて、苦しみながら死にます。悲しいなあ、空しいなあ、って、悲しんでる場合じゃない。もっと青春を謳歌する物語を作らなくては、人々は振り向いてはくれません！　そうやって人間たちは営み、ゆっくりとアイデンティティをクライシスしていくのである。
ふう、ようやく文学的っぽい言葉が出て来た。ロボットなんてくだらないモテないことを言っていたらダメダメ。こういう崇高な言葉を繰り返せば、人の知的好奇心を刺激することが、可能だよね。ああ、まったく面白いなあ、世の中ってやつは、ほら、お月さんも俺のことを見下しているぜ！　お鼻の長い象さんの滑り台は、俺を憐れみの瞳で、死んでいる目で、死んでいる俺を見つめているぜ！
ああ、ちくしょう、なんでこんなことになっちまったかなぁ。
もうちょっとマシな人間になれればよかったのに、まったく、まあいいや。まったくもってキ〇ガイ沙汰であり、時折みんなから冷たい目線を送られることもあるけど、まあ、だいたいは上手くやっている。空気も読むしね。

……アイデンティティーの崩壊。

続く。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4010l/

哀愁深まり

2010年10月13日20時30分発行